

# 岐阜県における埋甕の様相

—埋甕の施工率について—

岩 永 祐 貴\*

Aspects of Buried Pottery in Gifu Prefecture  
: A Consideration Construction Rates

Yuki IWANAGA

## 要 旨

縄文時代中期後葉に多く見られる埋甕（住居内埋設土器）風習は、東北や信州を中心に広がり、今回検討を行った岐阜県にも伝播している。

本稿は、埋甕の集成を行い、中期後葉の住居にどれほどの確率で埋甕が施工されるか検討したものである。その結果、埋甕は従来指摘されているように、岐阜県内では中期中葉から出現し、中期後葉にピークを迎える。ただし、最も盛栄する唐草文3段階においても施工率は約50%であった。

唐草文3段階の埋甕が急激に増加する時期は、大木8b式の西進・南進によって大柄渦巻文が唐草文系土器に施文される時期と重なり、大木式の影響が埋甕の伝播にも関連している可能性を指摘した。

キーワード：埋甕、伝播、施工率、唐草文系土器

## はじめに

縄文時代中期後葉には、土器を住居内に埋める風習が東日本を中心に広がっている。この遺構を埋甕（住居内埋設土器）と呼び、東は東北、西は東海で確かな事例が確認される<sup>1), 2), 3)</sup>。埋甕は縄文時代中期後葉に盛栄し、後期中葉にはほぼ消滅する。埋甕の研究は古くから存在するが、1970年代から80年代にかけて行われた、木下忠・渡辺誠らの研究が、現在における埋甕用途論の基礎となった<sup>4), 5), 6), 7)</sup>。また、佐々木藤雄・丹羽佑一は埋甕から縄文時代の社会背景に論及し、埋甕研究から縄文時代の社会を復元する第1歩となった<sup>8), 9)</sup>。今日までの縄文時代の研究の歩みの中で、埋甕研究は1980年代以降、停滞気味である。

本稿は、中部高地・関東地方に比べ研究が未開拓である岐阜県を分析対象とし、埋甕の基礎的なデータとして、中期後葉の住居にどれだけ埋められ、当該期の住居における埋甕の施工率がどの程度か把握するものである。

平成29年9月19日受理 \*文学研究科文化財史科学専攻博士前期課程 在学生



図1 埋甕の出土事例

## I. 研究史

### (1) 埋甕の用途・機能に関する研究

埋甕の用途には、貯蔵・幼児埋葬・胎盤収納・建設儀礼などが想定されている。埋甕の研究は古く、鳥居龍藏は『諏訪史』の中で埋甕の用語は使用しないものの、埋甕と思われる遺構の説明をしている<sup>10)</sup>。このほか1950年代にかけ、大場磐雄らが埋甕の用途について考察を行なっている<sup>11)</sup>。そうした中で、埋甕の用途論に深く言及し、埋甕研究の第一人者となったのは、尖石遺跡・与助尾根遺跡を発掘した宮坂英式である。宮坂は、貯蔵目的とするものならば出入口と想定できる南側に土器を埋めないとして、貯蔵ではなく宗教的な遺構とした<sup>12)、13)</sup>。

**貯蔵説** 貯蔵とする意見は、宮坂光昭と中村倉司が唱えている。宮坂は、土器を地中に埋めることによって、湿度や温度が保存に適すること指摘する。正位は取り出しが容易であり、逆位と比較して温度・湿度が一定しないことから短期の貯蔵用とした。また、逆位の埋甕に関して、長期の貯蔵用とした<sup>14)</sup>。中村倉司は2011年までの主な研究をまとめた。その上で、埋甕は貯蔵に適するだけでなく、鼠といった保存食料を食べる外敵から守る役割もあったとして、埋甕は貯蔵のための施設とした<sup>15)</sup>。

**幼児埋葬説** 幼児埋葬施設とする研究は渡辺誠の研究が代表的である。渡辺は、殿平賀貝塚の埋甕から幼児骨が出土したことから幼児埋葬施設と結論づけた<sup>7)</sup>。しかし、この事例は後に後期のもものと分かり、土器の大きさに合わせて掘られたピットではないことから埋甕ではないと批判がある<sup>4)、16)</sup>。佐藤洋は埋甕の分布と、口径と器高の法量分析・別時期の幼児埋葬例を論拠に埋甕は、幼児埋葬施設となると捉えた。埋甕は広域に分布しているため、族外婚によって伝播していると推論している<sup>17)</sup>。金子義樹は幼児埋葬とはしないものの、埋葬施設とする説を唱える。内容物や器形・周辺施設のバラエティーに富んだ属性から、逆位埋甕を埋葬施設としその他の埋甕は他の用途で埋められたと考えた。しかし、他の用途について具体的な言及はない。また、金子氏は埋甕の名称に疑問を抱き、「埋甕」と使うことをやめ「埋設土器」に統一すべきではないかと提案している<sup>18)</sup>。

**胎盤収納説** 木下忠は埋甕について、胎盤収納を想定している。木下は民俗例である「胎盤を戸口に埋める風習」が縄文時代にも存在し、それが埋甕であるとした。この民俗事例の分布と埋甕の分布が一致していることを論拠とした。また、縄文から現代までこの事例が続くと捉えるな

らば、弥生・古墳時代では竪穴住居内の貯蔵穴がこの民俗事例にあたると述べた<sup>4)</sup>。また、桐原健は埋甕周辺に石棒を置くなどの行為があり、貯蔵ならばこの行為を行うことは不可解なため貯蔵説を否定する。そして、埋甕周辺に蓋石等の施設を伴うものを幼児埋葬施設とし、伴わないものを胎盤収納とした<sup>19)</sup>。

**建設儀礼説** 水野正好は、埋甕を建設儀礼における祭祀遺物と捉える説を唱えている。水野は、埋甕が複数出土する住居を分析し、住居建て替え時に古い住居壁を抉り新しい埋甕を置いていることを見出す。その上で、住居を建造時には埋甕をすることを決めて建てており、幼児埋葬とするには疑問があるとして、建設儀礼に対する遺構と捉えた<sup>20)</sup>。しかし、他の建て替えを行った形跡が残る住居から必ず埋甕は出土しないという批判がある<sup>2)</sup>。

**宗教的な用途とする説** 神村透は、1遺跡での出土数・埋甕の形態・住居内での位置・埋甕の器形と分量・文様・型式・内容物・周辺施設・住居内での個体数の分析を行った。水野正好も示したように、建造当初から埋甕が存在することは、出産に関わる儀礼とするには疑問があるとし、埋甕は宗教的な遺物であると結論づけた<sup>16)</sup>。さらに、翌年神村氏は伏甕（逆位の埋甕）に限定して、土器の大きさや器形を選んでいることや、底部穿孔・貼り床・住居中央に埋められる属性を抽出し、埋める目的があって埋めていると考えた。それは地中の精霊を穿孔を通して迎え、貼り床で封じ込める目的ではないかと推論している<sup>20)</sup>。

**シンボルと捉える説** 百瀬忠幸は、住居の「内」と「外」におけるシンボルを表しているという説を唱えている。百瀬は、埋甕に見る属性を抽出し、従来の研究を否定し、埋甕を儀礼行為の一形態と考え、家の内・外の境界に対して行われた儀礼とした。さらに、土器型式差と埋置法の差は地域を1単位とする集団が選択したシンボルと考えている<sup>21)</sup>。

**柄鏡形敷石住居からの出土** 埋甕は、竪穴住居からの出土ではなく、特殊な住居からの出土事例もある。その住居は柄鏡形敷石住居であり、この住居の張り出し部からの出土事例が関東を中心に報告されている。柄鏡形敷石住居と埋甕を関連させた研究の代表的な人物は、山本暉久である。山本は、関東と福島・宮城・岩手・新潟・長野の227遺跡435住居址例の柄鏡型敷石住居から出土する埋甕を集成し、この住居の1つの属性として、埋甕を取り上げ分析した<sup>22)</sup>。分析では、柄鏡形敷石住居に埋設される埋甕の埋葬位置・埋葬個体数・埋葬状態・破損状態を時期別にグラフ化し、中期末から後期初頭にかけて画期が見られることを示している。そして山本は、この画期にあたる中期末から後期初頭に、柄鏡形敷石住居の埋甕が「本来的な幼児埋葬用途から逸脱し、妊娠・再生にかかわる呪術的・祭祀的な容器・施設一場へと変質した」と想定した。こうした点から山本は、住居内埋甕風習は、中期末・後期初頭において、柄鏡形敷石住居の成立をきっかけに、性格を変化させたとした。

また、山本だけでなく川名広文も柄鏡形敷石住居と埋甕の関係について検討を行っている。川名は山本が集成する前に柄鏡形敷石住居と埋甕の關係に注目し、上記で述べた百瀬氏と共通して柄鏡形住居の張り出し部の埋甕に境界のシンボルとする性格を与えた<sup>23)</sup>。

**用途・機能論の到達点と課題** 現在有力とされる考えは幼児埋葬説・胎盤収納説である。しかし、明確な用途が判明していないことは最大の課題と言える。

ここでまとめた先行研究は、埋甕の属性を抽出し、様々な方面からアプローチをしているが、

最終的には各研究者の主観的な見解が入り、飛躍した結論となっている。また、埋甕内部からは遺物がほとんど検出せず、検出された場合においても、土器や石匙・骨片など共通性のない内容物であるという点も用途が決着しない要因でもある。さらに、ほとんどの考え方において、中期後葉から後期初頭にかけて盛栄し、その後すぐ埋甕風習が消滅していくことが説明できていないことが共通した課題である。

用途論の決着には、確実に幼児骨が出土するなどの内容物の充実が不可欠であり、今後の資料の増加に期待したい。

## (2) 埋甕からみる社会背景に関する研究

**通婚圏に関する研究** この分野において、代表的な研究は佐々木藤雄による研究である。佐々木は、長野県八ヶ岳・諏訪地域の異系統土器の分析を行い、地域別に見て、埋甕に使用される土器構成割合が異なることを示す。民俗学的研究の成果を受けて、土器は女性が作ると想定し、埋甕の土器選択には、女性の出自に関わる「女性原理」があるということを論拠に土器型式の差は女性の移動、つまり通婚圏を想定するものとされる<sup>8)</sup>。また、長野・山梨・神奈川・東京の埋甕の分析を行い、土器分布に見合った埋甕に使用される型式構成を明らかにし、時期別での検討を加えた割合から、小地域での婚姻関係を見出した<sup>24)、25)</sup>。

丹羽佑一も埋甕から通婚圏を見出す研究を行った。天竜川流域において、底部の有無と埋甕が複数出土する住居の分析から少なくとも埋甕を行う3集団での族外婚姻に関わる移動があったとした。埋甕は石棒といった男性的遺物と住居内で対となって出土することから、女性的遺物であるとし婚姻によって別集団にきた女性が埋めたとしている<sup>9)</sup>。

**埋甕の伝播に関する研究** 植田文雄は埋甕の伝播について検討を行っている。関西以西の埋甕・甕棺を集成し、中部地域から近畿への伝播状況を確認する。その上で、縄文時代中期末は寒冷になりつつある背景から、山の民が山を降り平地民と出会い、婚姻をすることで埋甕風習が西へ伝播していくと推察した。植田氏は用途について、中期・後期初頭の埋甕を呪術的遺物とし、後期前・中期の甕棺を墓とした<sup>26)</sup>。

**社会背景に関する研究の到達点と課題** 埋甕からみる社会背景に関する研究は、人の動きに結び付け、婚姻関係を考察する研究が多い傾向にある。その背景には、土器作りは女性の仕事として捉え、女性の出自に関わるとする論理が埋甕研究に大きく関連している。しかしながら、これまで示してきた先行研究の分析が「通婚圏」と解釈できるものであるか疑問が残る。実際に、このような通婚や婚姻を示すような人間の移動が、存在するか埋甕の伝播を詳しく検討する必要がある。

## (3) 岐阜県内の埋甕の研究史

**先行研究の概要** 岐阜県内の埋甕に重点を置いた研究は存在しないが、大石崇史の2009年の論考では、集落遺跡の集成作業が行われている。この中で、埋甕についても若干の集成が行われている<sup>27)</sup>。これによると、県内の埋甕は29遺跡132基が報告されている。飛騨地方では岩田崇・大石崇史によって中期後葉に埋甕が施工される住居数は58例であると報告されている<sup>28)</sup>。美濃地方で

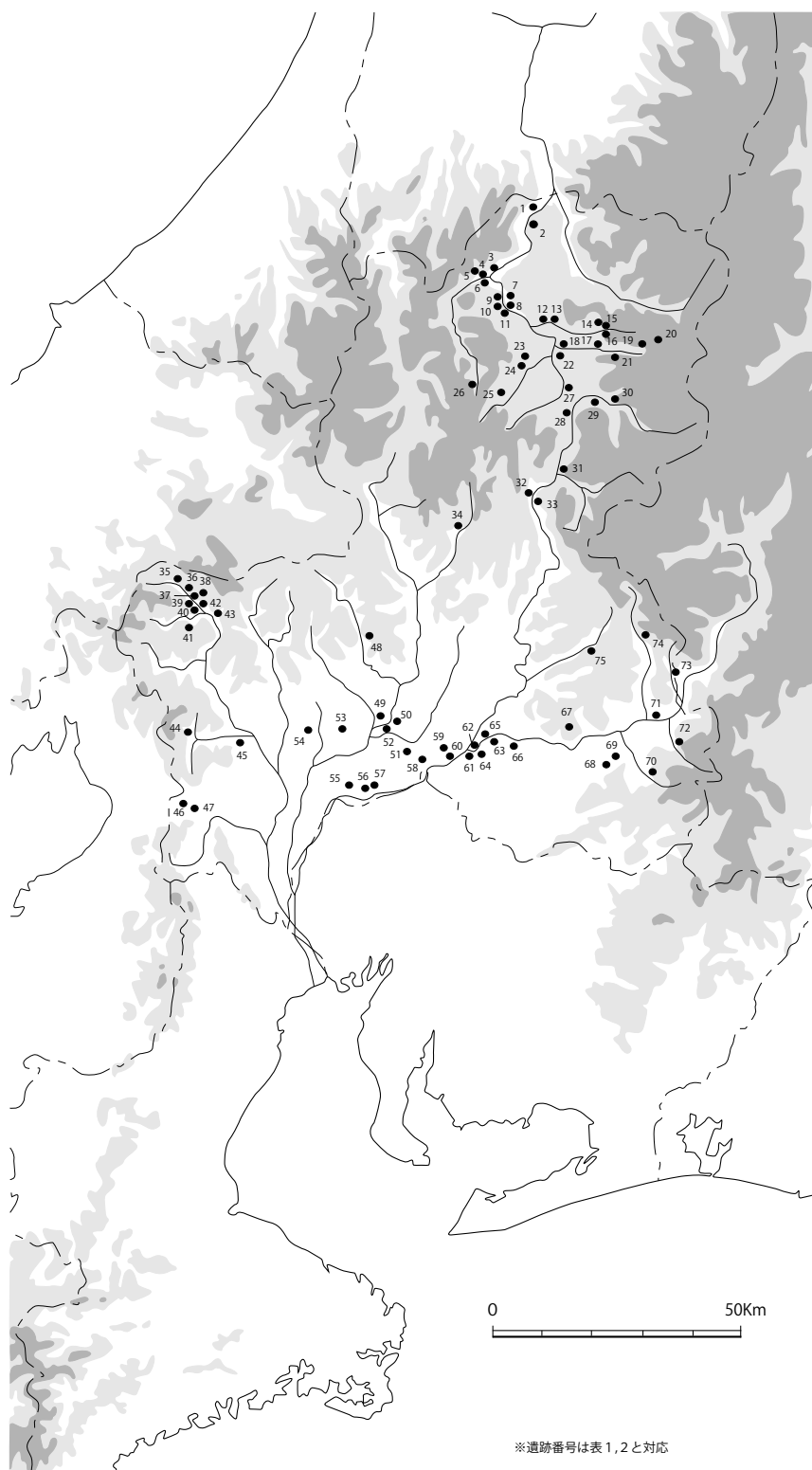


図2 縄文時代中期後半の集落分布

表1 住居集成1

	中期後葉住居数 (軒)						合計
	井戸尻末	唐草文1	唐草文2	唐草文3	唐草文4	不明	
1 杉原瑞穂		2					2
2 島		2	3	15	1	5	26
3 堂ノ前	7	2	2			5	16
4 大明神			1	2			3
5 中田水そへ						1	1
6 下田	4						4
7 岡前		1	1	4			6
8 御番屋敷						1	1
9 中野大洞平			2				2
10 中野山越	4		6	6		3	19
11 黒内細野			1	3			4
12 森ノ木						11	11
13 荒城神社				1		1	2
14 牛垣内		1	2	3		1	7
15 西田						1	1
16 カクシクレ			1				1
17 無手無冠農場				1			1
18 垣内		3	11	16		18	48
19 岩垣内		3	3	15	2	4	27
20 旗鉾						2	2
21 寺東				5			5
22 ツルネ			1				1
23 与島A						1	1
24 赤保木		9	6	4		4	23
25 上岩野	5	1	10	27		14	57
26 門端			2	5			7
27 江名子糠塚				1			1
28 堂之上	4	2	1	9	15		31
29 森ノ下						28	28
30 ごうろう						21	21
31 水口						1	1
32 的場						24	24
33 桜洞神田				6			6
34 店町				1		5	6
35 塚奥山	1	6	5	5	10	0	27
36 塚					4		4
37 櫛原村平			1	1		2	4

は、2003年の春日井恒・長谷川幸志の論考の中で、埋甕の集成がされている<sup>29)</sup>。

**県内の研究の到達点と課題** 集成作業が中心的に進められ、岐阜県内にどれほどの埋甕が存在するのか判明している。ただし、最新の集成から8年経過し飛騨市では報告書の刊行が進み、資料の蓄積が進んできた。この成果を含めた集成の提示が必要となる。また、信州を中心に埋甕か

表 2 住居集成 2

	中期後葉住居数 (軒)						合計
	井戸尻末	唐草文1	唐草文2	唐草文3	唐草文4	不明	
38	いじま				4		4
39	山手宮前		3				3
40	上原				2	1	3
41	戸入村平		5	1	1	9	16
42	尾元				1	2	3
43	下開田村平					1	1
44	岩井谷		2		2		4
45	舟子					1	1
46	小関御祭田				1		1
47	中野				1	3	4
48	底津			6	4		10
49	塚原	1	3		12		16
50	重竹			1		2	3
51	大杉西					1	1
52	一ノ門			1			1
53	椿洞		1				1
54	御望				2		2
55	六軒				2		2
56	防風林					1	1
57	炉畑		2	3	3	2	10
58	東野			1			1
59	仲迫間					1	1
60	野笹					2	2
61	宮之脇	3	3	17	5	1	29
62	牧野小山	6	1	1	3		11
63	立壁A					1	1
64	神明	1	1	2			4
65	造道					1	1
66	林					1	1
67	鹿路山		1				1
68	下田	1					1
69	祖理見	1					1
70	阿曾田		5	17	1		23
71	上地					1	1
72	実戸東					4	4
73	門垣戸	1	2	1		1	5
74	尾ヶ平					5	5
75	陰地	1	1				2
	合計	25	47	89	181	76	612

ら社会背景を見る研究が進められてきたが、そもそも当該期の住居にどの程度の確率で埋甕が施工されているのか、示したものはほとんど存在しない。



## Ⅱ. 県内における埋甕の出土数と分布

### (1) 埋甕の出土数

研究史でも触れたように、大石・岩田の集成によって2009年までの把握はされている。これ以降に資料が蓄積した飛騨市の動向を踏まえた集成を行った。岐阜県内からは、39遺跡168基の埋甕が確認された。特に、飛騨地方や木曾川流域に埋甕出土遺跡が多い傾向にある。また、ダム建設のため発掘事例が多い徳山地域でも、多くの出土例がある。

これまでの集成では、中期後葉という区分によって集成が行われていたが、本稿では、確実に時期が確定できた151基の細分を行い、その時期別の埋甕出土数を示す(表3)。

**井戸尻末期** 中期中葉に当たる段階であり、中期後葉の区分からは外れるが、埋甕が確認されるため集成を行った。当該期の埋甕は2遺跡3基である。堂ノ前遺跡では、2軒の出土住居が確認されその1つから、上山田式土器が住居中央付近から出土している<sup>30)</sup>。

**唐草文1段階** この段階でも出土数は少なく、3遺跡3基を確認した。井戸尻期での出土がある堂ノ前遺跡でも1基確認され、堂ノ前遺跡では埋甕風習が継続している。

**唐草文2段階** 埋甕出土数が徐々に増加する時期である。9遺跡16基を確認した。

**唐草文3段階** 遺跡数・埋甕出土数ともに最大となる。24遺跡119基を確認した。宮乃脇遺跡では、16基の埋甕が出土しており、1遺跡から最も多くの出土があった<sup>31)</sup>。

**唐草文4段階** 前段階から急激に出土数が減少する。9遺跡10基を確認した。集成では示していないが、黒内細野遺跡などで後期の堀之内式期での埋甕が存在しており、唐草文4段階から埋甕風習が継続していると考えられる<sup>32)</sup>。

以上、岐阜県における埋甕出土数を確認した。従来指摘されているように中期中葉から埋甕が確認され<sup>33)</sup>、唐草文3段階にピークとなる。

### (2) 埋甕の分布 (図3)

岐阜県内で埋甕が出土する遺跡は、各地域に見られ飛騨地方に多くの遺跡が集中している。時期別に埋甕出土遺跡を確認することによって、地域的な偏りがあるか見ていきたい。

**井戸尻末期** 飛騨と東濃において2遺跡確認できる。北陸・信州と隣接する県境に近いところで埋甕が出土している。

**唐草文1段階** この段階も前段階の傾向を引き継ぐ。しかし、木曾川流域では内陸部への西進が1遺跡のみであるが確認できる。

**唐草文2段階** 埋甕出土遺跡の増加に伴って、県境周辺以外でも出土するようになる。この段階になって西濃地域で初めて埋甕が確認できる。

**唐草文3段階** 埋甕出土例が最も多く、西濃地域は少ないが各地域で見られるようになる。ただし、飛騨地方や木曾川流域に埋甕出土遺跡が集中する傾向がある。

**唐草文4段階** これまで多く埋甕が出土していた飛騨地方で出土が確認できなくなる。埋甕が多くはなかった西濃地域に分布が広がる。ただし、1遺跡からの出土数は少ない。

以上、埋甕出土遺跡の分布を確認した。埋甕出現期は県境周辺に分布していたが、出土数のピー



表3 埋甕集成表

		埋甕出土住居数					埋甕出土数						
		井戸尻末	唐草文1	唐草文2	唐草文3	唐草文4	不明	井戸尻末	唐草文1	唐草文2	唐草文3	唐草文4	不明
2	島			2	5				2	6			
3	堂ノ前	2	1	2			2	1	3				
4	大明神				2					2			
7	岡前				1					1			
10	中野山越				2					3			
11	黒内細野				1					1			
12	森ノ木						2					2	
13	荒城神社				1		1			1		1	
14	牛垣内				1					1			
17	無手無冠農場				1					1			
18	垣内				9		3			14		3	
19	岩垣内			1	7		3		1	8		3	
21	寺東				5					13			
25	上岩野			1	11				2	13			
26	門端				3					6			
27	江名子糠塚				1					2			
28	堂之上				4					6			
31	水口						1					1	
32	的場						1					1	
33	椀淵神田				6					6			
34	店町				1					2			
35	塚奥山				3	1	1			3	1	1	
36	塚					1					1		
39	山手宮前			2					2				
41	戸入村平			2			1		2			1	
46	小関御祭田					1					1		
47	中野					1					1		
48	底津				1	1				1	1		
49	塚原					1					1		
54	御望					1					1		
57	炉畑				2		1			2		1	
58	東野				1							1	
61	宮之脇				13	2				16	2		
62	牧野小山		1			1		1			1		
64	神明					1				1			
70	阿曾田				1	8			1	10			
71	土地						1					2	
73	門垣戸	1			2			1		2			
75	陰地		1	1				1		1			
	合計	3	3	14	90	10	15	3	3	16	119	10	17

表4 編年表

	関西	東海	飛騨	北陸	中部高地	甲府盆地	関東	南東北
中期中葉	船元Ⅲ	北屋敷	井戸尻Ⅲ	上山田・天神山	勝坂(井戸尻Ⅲ)			
中期後葉	里木Ⅱ	中富	唐草文1	古府	唐草文1	曾利Ⅰ	加曾利E1	大木8a
			唐草文2	古串田新	唐草文2	曾利Ⅱ	加曾利E2	大木8b
	北白川C	神明 取組	唐草文3	串田新Ⅰ	唐草文3	曾利Ⅲ	加曾利E3	大木9
			串田新Ⅱ	曾利Ⅳ				
中期末		島崎Ⅲ・山ノ神	唐草文4	前田・岩峯野	唐草文4	曾利Ⅴ	加曾利E4	大木10
後期初頭		中津		中津		称名寺		南境

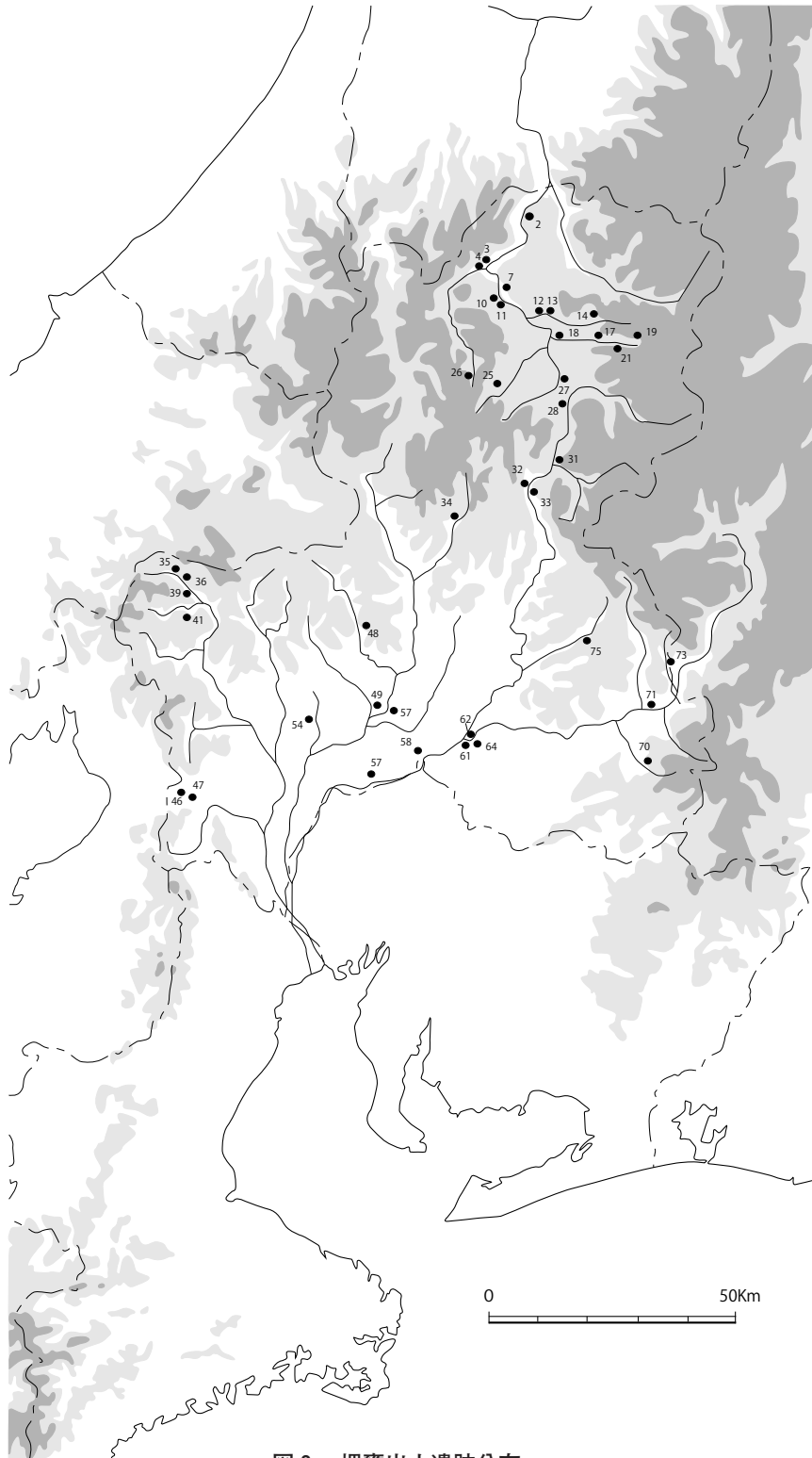


図3 埋甕出土遺跡分布



1 井戸尻末期



2 唐草文1段階



3 唐草文2段階



4 唐草文3段階



5 唐草文4段階

図4 埋甕時期別分布



1 上山田式 堂ノ前遺跡



2 唐草文2段階 岩垣内遺跡



3 唐草文3段階 上岩野遺跡



4 串田新系 上岩野遺跡

写真1 岐阜県内出土埋甕

クとなる唐草文3段階では、飛騨地方・木曽川流域を中心に広く分布している。中期末になると西濃地域の遺跡数増加が認められる。また、木曽川流域や中濃にも埋甕出土遺跡が分布しており、埋甕の中心が飛騨から美濃へ変化していることがわかる。

### Ⅲ. 埋甕の施工率

#### (1) 岐阜県内の住居集成

中期後葉の総住居数 埋甕の施工率を検討するために、中期後葉の住居を集成した(表1、2)。県内には、明確に縄文時代中期後葉の竪穴式住居と言えるものが、75遺跡612軒存在した。この

内、418軒が時期別に細分が可能であった。これらを時期別に分けると、井戸尻末期25軒、唐草文1段階47軒、唐草文2段階89軒、唐草文3段階181軒、唐草文4段階76軒であった。

**埋甕出土住居** 表3で示している通り、井戸尻末期3軒、唐草文1段階3軒、唐草文2段階14軒、唐草文3段階90軒、唐草文4段階10軒である。

## (2) 施工率

中期後葉の総住居数と埋甕出土住居数を確認した。そして、埋甕の施工率を出していきたいが、1住居から複数の埋甕が出土する場合がある。これは、住居の建て替えが原因と考えられるが、明確に建て替えていると認定できなかったものが含まれているため、本稿では建て替えを考慮しない住居数での検討を行った。

井戸尻末期、12%、唐草文1段階、約6%、唐草文2段階、約16%、唐草文3段階、約50%、唐草文4段階、約13%であった。中期後葉全体としては、約29%の確率で埋甕は施工されている。

## IV. 考 察

以上、岐阜県における埋甕の出土数や分布・施工率を検討した。出土のピークとなる唐草文3段階では、おおよそ50%の確率で埋甕が施工され、その後の中期末葉では埋甕の中心が飛騨から美濃へ南進していることがわかった。

唐草文2段階から3段階で埋甕が急激に増加するが、当該期では東北地方を中心に広がる大木8b式の西進・南進が従来から指摘されている<sup>34)</sup>。この大木式の影響によって信州では唐草文3段階に大柄渦巻文が施文されるようになる。

こうした、大木8b式の西進・南進が岐阜にも影響を与え、埋甕風習が信州・北陸から伝わり唐草文3段階に爆発的に増加したと推測できる。そして、唐草文4段階でさらに西・南へ中心地が移動していったと考えられる。

## おわりに

住居内埋設土器文化の端である岐阜県での埋甕の施工率を検討した。その結果、約29%であった。しかし、埋甕のピークである唐草文3段階期には約半数の住居で施工される。その背景には、大木式の西進・南進が関わり埋甕が東から伝播してくる可能性を指摘した。そして、植田<sup>27)</sup>の追認となるが、分布の検討から埋甕が西・南へ伝播していくことを再確認した。

課題としては、山梨県や長野県といった埋甕が多く出土している地域と比較し、岐阜県は低確率か高確率かを確認しなければならない。また、大木式の影響を土器の面から確認する必要がある。これだけではなく、埋甕の「埋設方法」「土器の欠損」といった属性分析を行い、信州や東北の埋甕と岐阜の埋甕を比較し、地域性が存在するのか検討が必要であろう。さらに、住居形態との関連を検討していきたい。

## 謝 辞

本稿は、平成27年度に奈良大学文学部文化財学科へ提出した卒業論文について、ご指摘・ご批判があった「埋甕の施工率」を検討したもので、卒業論文の一部に加筆・修正を行ったものである。本稿・卒業論文を執筆するにあたり、大学院の指導教員である小林青樹先生・豊島直博先生をはじめ、坂井秀弥先生・植野浩三先生には日頃から厚いご指導をいただいた。また、瀬口眞司氏のご厚意により、卒業論文の内容を近江貝塚研究会において発表する機会をいただいた。そして、以下の諸氏・諸機関には、資料の見学の便宜を図っていただき、貴重なご意見・ご指摘をいただいた。末筆ではありますが、記して感謝の意を表します (50音順、敬称略)。

大石崇史、大熊茂弘、大宮次郎、岩田 崇、長田友也、清水則久、中村耕作、  
長江真和、馬場伸一郎、三好清超

各務原市教育委員会、各務原市埋蔵文化財調査センター、可児市教育委員会、川合考古資料館、  
岐阜県文化財保護センター、久々野歴史民俗資料館、下呂市教育委員会、下呂ふるさと歴史記念館、  
高山市教育委員会、高山市図書館清見分室、高山市風土記の丘学習センター、飛騨市教育委員会、  
飛騨の山樵館、みやがわ考古資料館

## 註

- 1) 阿部勝則2008「埋甕 (東北地方)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 1116-1121頁
- 2) 佐々木藤雄2008「埋甕 (中部・関東地方)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 1122-1127頁
- 3) 末木 健1999「遺構研究 埋甕」『縄文時代10号』第3分冊 縄文時代文化研究会, 221-226頁
- 4) 木下 忠1981『埋甕—古代の出産習俗—』雄山閣
- 5) 渡辺 誠1968a「埋甕考」『信濃』20巻4号, 32-36頁
- 6) 渡辺 誠1968b「埋甕考 (続)」『古代文化』20巻7号, 152-156頁
- 7) 渡辺 誠1970「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40号, 9-17頁
- 8) 佐々木藤雄1981「縄文時代の通婚圏」信濃33巻9号信濃史学会, 45-74頁
- 9) 丹羽佑一1980「埋甕集団の構成と婚姻システム」『文化財学報』第9号 奈良大学, 39-61頁
- 10) 鳥居龍蔵1924「本郷村立澤附近の遺蹟」『諏訪史 第1巻』, 37-38頁
- 11) 大場磐雄1955「主要縄文式堅穴の考察」『平出』平出遺跡調査会編, 197-202頁
- 12) 宮坂英式1950「八ヶ岳西山麓与助尾根先史集落の形成についての一考察」『考古学雑誌』第36巻第4号, 47-51頁
- 13) 宮坂英式1957『尖石』茅野市教育委員会
- 14) 宮坂光昭1965「縄文中期勝坂と加曾利E期の差」『古代』44号, 25-31頁
- 15) 中村倉司2011「縄文時代の屋内調理と貯蔵穴—埋甕炉そして埋甕とCピットの用途」『埼玉県立史跡の博物館紀要』5号, 27-56頁
- 16) 神村 透1973「南信地方の埋甕について—その学史と事例—」『長野県考古学会誌』No.15, 19-40頁
- 17) 佐藤 洋1976「縄文時代の埋甕風習」『物質文化』27, 13-32頁
- 18) 金子義樹1984「縄文時代における埋甕について—試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』19号, 75-125頁



- 19) 桐原 健1967「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3, 43-51頁
- 20) 水野正好1978「埋甕祭式の復原」『信濃』30号4巻, 256-265頁
- 21) 神村 透1974「埋甕と伏甕—その違い—」『長野県考古学会誌』No.19, 20, 17-33頁
- 22) 百瀬忠幸1987「埋甕と境界性について」『長野県埋蔵文化財センター 紀要』1号, 42-65頁
- 23) 山本暉久2002「柄鏡形(敷石)住居と埋甕祭祀」『敷石住居址の研究』六一書房, 257-300頁
- 24) 川名広文1985「柄鏡形敷石住居址の埋甕にみる象徴性」『土曜考古』10号, 73-95頁
- 25) 佐々木藤雄1997「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族(上)」『先史考古学論集』第6集, 31-54頁
- 26) 佐々木藤雄1998「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族(下)」『先史考古学論集』第7集, 49-88頁
- 27) 植田文雄1991「拡張、あるいは展開する縄文文化—西日本における埋甕の出現とその変容をめぐって」『滋賀考古』5, 1-31頁
- 28) 大石崇史2009「岐阜県における縄文集落関係遺構」『第10回記念研究集会発表要旨集』関西縄文文化研究会, 321-369頁
- 29) 岩田崇・大石崇史2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文時代文化研究会, 27-44頁
- 30) 春日井恒・長谷川幸志2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文時代文化研究会, 45-60頁
- 31) 林直樹・早川正一1996『堂ノ前遺跡発掘調査報告書』宮川村教育委員会
- 32) 吉田英敏1994『川合遺跡群』可見市教育委員会
- 33) 中山豊・北平朗久2014「黒内細野遺跡」飛騨市教育委員会
- 34) 長田友也2010「東海地方の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ 葬墓制』雄山閣, 255-272頁
- 35) 水沢教子1996「大木8b式の変容(上)」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター, 84-123頁

## 参考文献

- 泉 拓良2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 502-509頁
- 太田 圭2017「縄文時代における屋外土器埋設遺構の研究—「埋甕」のこれまでとこれから—」『Archaeo-Clio』第14号 東京学芸大学, 1-26頁
- 奥美濃地域研究会2005「岐阜県奥美濃地域の遺跡紹介—1—郡上市立明宝歴史民俗資料館収蔵資料の紹介」『美濃の考古学』第8号
- 長田友也・高橋健太郎2015「付 岐阜県関ヶ原町中野遺跡出土土器の紹介」『東海縄文研究会第5回例会予稿集 咲畑式土器とその周辺 その2』東海縄文研究会, 29-32頁
- 狩野 陸2008「申田新式・大杉谷式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 480-485頁
- 櫛原功一2008「曾利式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 426-435頁
- 額額茂・高橋健太郎2008「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 494-501頁
- 小島俊彰2008「上山田・天神山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 466-471頁
- 小矢部市教育委員会2006「桜町遺跡縄文土器検討会資料集—縄文時代中期末・後期初頭について—」
- 佐々木藤雄1975「埋甕論ノート」『異貌』3, 20-42頁
- 佐々木藤雄1983「縄文時代の親族構造」異貌10号, 56-83頁
- 佐々木藤雄1986「縄文時代の家族構成とその性格」異貌12号, 82-131頁
- 東海縄文研究会2017『第2回東海縄文研究会シンポジウム予稿集 咲畑式とその周辺』

- 富井 眞2008「北白川C式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 510-515頁
- 永瀬史人2008「連孤文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 418-425頁
- 布尾和史2004「縄文時代中期(上山田式期・古府式期)の遺構出土資料〔石川県・富山県〕『縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—資料集』縄文集落研究グループセツルメント研究会, 330-338頁
- 細田 勝2008「加曾利E式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 410-417頁
- 増子康眞1999「東海地方 中期後半」『縄文時代』10号 第2分冊, 135-140頁
- 本橋恵美子1992「埋甕にみる動態について—縄文時代中期後半の遺跡の検討から—」『古代』第94号 早稲田大学考古学研究会, 85-126頁
- 百瀬忠幸1984「縄文時代における地域性と地域集団—長野県中・南信地方をめぐって—」『異貌』11号, 61-83頁
- 山田康弘2007「土器を埋める祭祀」『原始・古代日本の祭祀』同成社, 23-41頁
- 山田康弘2008『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
- 吉川金利2008「唐草文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 436-443頁

#### 発掘調査報告書

- 浅野哲男ほか2000『岩井谷遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 石原哲彌ほか1988『寺東遺跡、西保木(対岸)遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 石原哲彌ほか1991『垣内遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 上嶋善治1995『岡前遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 上嶋善治1997『カクシクレ遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 上原真昭2000『岩垣内遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 宇野治幸1993『追分遺跡・下開田村平遺跡』岐阜県教育委員会
- 大江まさる1973『炬燵遺跡発掘調査報告書』各務原市教育委員会
- 大知正枝1997『小関御祭田遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 大宮次郎2005『上岩野遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 各務光洋1993『陰地遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 清見村教育委員会1983『門端縄文遺跡発掘調査報告書』
- 熊崎 保1986『桜洞神田遺跡』萩原町教育委員会
- 小谷和彦1997『山手宮前遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 佐野康雄1995『飛瀬・底津遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 篠原英政・吉田英敏ほか1989『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会
- 田中彰ほか1992『江名子糠塚遺跡・無手無冠農場遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 谷口和人ほか1997『西田遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 戸田哲也1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』吉城郡古川町教育委員会
- 戸田哲也1997『堂之上遺跡』大野郡久々野町教育委員会
- 野村宗作ほか1998『牛垣内遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 平田篤志ほか2007『赤保木遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター
- 堀 正人ほか1989『椿洞遺跡—岐阜市民公園整備関連事業—』岐阜市教育委員会
- 坂東 肇ほか2000『戸入村平遺跡Ⅱ・小谷戸遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 紅村 弘1974『飛驒桜洞・沖田』萩原町教育委員会
- 紅村 弘1976『門垣戸遺跡』坂下町教育委員会
- 松田典人1990『店町遺跡—県道高山—八幡線・畑佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』明方

村教育委員会

増子 誠ほか1998『塚遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター  
増子康真ほか1971『神明遺跡』美濃加茂市教育委員会  
武藤貞昭1995『戸入村平遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター  
三島 誠2007『榎原村平遺跡』岐阜県教育財団文化財保護センター  
三好清超2012『鳥遺跡2・塩屋金清神社遺跡3』飛騨市教育委員会  
三好清超2013『大明神遺跡』飛騨市教育委員会  
三輪見三ほか2007『塚奥山遺跡』岐阜県教育財団文化財保護センター  
渡辺 誠1985『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会  
渡辺 誠ほか1993『荒城神社遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター  
渡邊 稔2007『中野大洞平遺跡Ⅱ』岐阜県教育財団文化財保護センター

挿図出典

図1 三好2012, 戸田1997より引用。一部加筆。図2, 3, 4 大石2009, 東海縄文研究会2017を一部加筆し再トレース。写真は、筆者撮影。

## Summary

This paper examined the buried potteries in the residence of the late-Middle Jomon period in Gifu area. The buried potteries emerged in the mid-Middle Jomon period and peaked in the late-Middle Jomon period. As a result of considering the construction rates, they ware about 50% even at the highest period. They spread to the west at the daigi8b type, and the buried potteries rapidly increased. We can speculate that this may have had an effect on the propagation of buried potteries.

**Key words** : Buried pottery, Propagation, Construction, Arabesque pattern pottery